故郷第三場面　読んだ読んだ

三年二組　氏名

この時突然、わたしの脳裏に不思議な画面が繰り広げられた紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜が植わっている。～そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。わたしも一、二度何か贈り物をしたが、それきり顔を合わす機会はなかった。

主人公は、母の言葉でルントウとの思い出を思い出した。身分は自分の方が上なのにもかかわらず、ルントウにあこがれ、尊敬していた。ルントウの見ている空は、主人公が見ている建物に囲まれた四角な空と違って、枠のない広い空だと分かったからである。ルントウも心を開いていたが、二人は離れてしまい、会うことがなくなってしまった。

さん

母の言葉により、ルントウとの思い出が蘇った。ルントウは人見知りだが、主人公には心を開いてくれていた。ルントウは刈りをしていて、刈りの話をするとき、生き生きとしていて、きらきらと輝いている。外の世界をたくさん知っているルントウは、主人公にとって憧れだった。

そんなルントウとも別れの時が来た。主人公は声を上げてなき、ルントウは台所の隅で泣いていた。それほど嫌だったのだ。

その後、お互いに贈り物をしたが、それきりルントウと会うことはなかった。

さん

主人公にとってルントウは、自分とは別の世界で生きている憧れの存在であった。主人公はルントウの話を聞きながら、ルントウをうらやましく思うようになった。もっと一緒にいたかったが、とうとう正月が過ぎ、ルントウと別れなければならなくなった。二人は声を上げて泣いた。たとえ、使用人と雇い主という立場でも、二人は本当に仲良しだった。しかし、こまめに連絡を取り合うほどではなかった。

さん

三十年近く昔のこと、正月の台所で主人公とルントウは知り合い、仲良くなった。ルントウの話を聞いていくうちに、主人公はルントウは。尊敬する人物となった。ルントウも、主人公に心を開いていた。別れの時は両方とも悲しんでいたが、ルントウが帰った後、二人が再び会うことはなかった。

くん

主人公は、もう三十年ぐらい昔のことを突然、脳裏に繰り広げられた。一人と一匹が不思議な画面にいた。彼がルントウ。ルントウは狩りが上手いが、「チャー」には苦戦している。惜しくも逃げられてしまった。出会いは正月、台所で二人は出会った。それをきっかけとし、人見知りだったルントウは主人公にだけ心を許した。二人の間には絆ができた。だからこそ別れが辛く、主人公は声を上げて泣いた。別れたその後は、ちょっとした贈り物を数回したが、それきり顔を合わす機会はなかった。

さん

主人公は突然不思議な画面が脳裏に繰り広げられた。それはルントウとの思い出だった。主人公とルントウは、会って半日もしないうちに仲良くなった。主人公は、いろいろな知識を持っていて、それを教えてくれたルントウに憧れをもっていたことが、ルントウの心を神秘の宝庫だと思っている主人公からも分かる。

さん